

タイトル 私の経験的俳句観

私は、俳句に関心がある。小学4年生から実作を始めて、句会に参加したり、雑誌に投句したりしてきた。そうした経験の中で、自分なりに俳句について考えてきたことを述べたい。

私は、俳句をスポーツや芸能に近いものだと考えている。理由は2つある。

1つ目は、ある程度の型、ルールが決まっているということだ。俳句は、17音という限られた音数の中で原則季語を用いて表現を行う。これは、ルールの中で自由を楽しむスポーツに通じる。小林秀雄が『スポーツ』という評論で「人間が一定の目的を定め、定められた方法と秩序に従い、精神と肉体との完全な協力のもとに、全努力を傾注し、そこにおのずから、個性の優劣がはっきりと現れ出て来る。しかも選手たちは、定められた秩序や方法を、制約とは少しも感じていない。規律があることが楽しいのである。」と述べていることは、俳句にも全く当てはまる。また、生け花や能狂言で型が細かく定められているのにも関わらず、その中に表現者の個性を感じられるのも、制約の中での自由を象徴するものではないか。

2つ目の理由は、才能より経験、努力が重要であるということだ。俳人の波多野爽波は、若い俳人に向けて俳句は「とにもかくにも、理論より実行。練習に練習を重ねることだ」と説いた。また爽波は、多読多憶（たくさんのおうをよんで覚えること）、多作多捨（たくさん作ってたくさん捨てること）を主張し、体感的に俳句を身に付けることに重きを置いた。それに加えて、私は藤田湘子の『20週俳句入門』という本で俳句を学んだが、この本でも型・切字の習得が重視されている。

私も日々の句作の中で、型を身に付けておくことや先人の句を覚えておくことが、いかに重要であるかを感じている。例えば、以前句会に「青萩の青の交錯しなやかに」「余り苗小さく寄せて水口に」という2句を投句したことがあった。前者は、言葉のひとつひとつにこだわって作った句で、「青の交錯」という表現や試行錯誤の末に作った「しなやかに」という下五が自分の中では、気に入っていた。後者は、実際の景色をスケッチするように作った句だ。まったく推敲をしておらず句会の締め切りが迫る中穴埋めのつもりで提出した句だった。意外なことにその句会の先生が評価したのは後者の方だった。実景をそのまま詠んで俳句の形にうまくまとめられているという評だった。それに対し、前者は下五がとってつけたようだと指摘されてしまった。この経験から私が学んだのは、作為、わざとらしさという俳句で嫌われるものを極力生み出さないためにも、1句に時間をかけすぎるのはよくないということだった。つまり、1句にあれこれ手を加えるよりも、見たままの印象をスケッチするように俳句の形にまとめることが大切だったのだ。

こうしたことから、俳句を作るときに重要なのは、いかに即座に、反射的に感じたことを俳句にできるか、ということだといえる。そのときに型や名句にしっかり馴染んでおけば、自然に最適なリズム、構成となって俳句ができるわけだ。

このような点からも基礎練習・部分練習が上達には欠かせず、本番で即座にその力を出すことが大切なスポーツや、割り稽古と呼ばれる部分練習が欠かせない茶道などの伝統芸能に、俳句は近いといえる。

以上の「俳句は、小説や詩よりもスポーツ・芸能により近い」というのが、実作者としての私の俳句観の現在地だ。もっとも、俳句がスポーツ・芸能に近いというのは、私だけの意見ではない。先ほども述べた波多野爽波の『俳句スポーツ説』、清崎敏郎の『俳句芸能説』にもみられる。また、即座に感じたことを俳句にすると良いという考えは、古くは、『三冊子』における芭蕉の「物の見えたるひかりいまだきえざる中にいひとむべし」という発言にも見ることができる。さきほど紹介した『20 週俳句入門』を書いた藤田湘子は、無季・自由律を俳句として認めなかった俳人であるが、この本は、無季俳句の俳人である三橋敏雄にも高く評価された。したがって、型の習得が大事だというのは、俳壇の党派を越えた共通見解と言ってもいい。つまり、俳句がスポーツ・芸能に近いことは、実作者なら誰もが感じていることだといえるだろう。

このように、実作を経験した人にしか分からない俳句の見方・捉え方があるように感じる。私は、将来こうした視点を活かして、俳句を中心とする日本文学や文化の研究に携わりたいと思っている。しかし、その反面、俳句を体感的に身に付けてきたからこそ、俳句・俳人の好き嫌い、無季・自由律を俳句として認めるか否かなどに、見方の偏るところがどうしても出てきてしまう。そうしたことは、作品との出会いや自分の作風を狭めることに繋がりがかねない。だからこそ、私は大学で日本文学・文化全体について学ぶことで俳句の見方を広げたいと思っている。(1,971 文字)